

生涯研修プログラム Ⅲ) クリニカルカンファランス 7. 周産期医療と児の中長期予後

3) 双胎間輸血症候群

葛飾赤十字産院院長 進 純 郎

双胎間輸血症候群(twin to twin transfusion syndrome: TTTS)は一絨毛膜性双胎において胎盤血管吻合を介して、2児間に血流分配の不均衡が生じて発症するものである。

TTTSでは discordant twin が多く、羊水量の不均衡から受血児では羊水過多、供血児では羊水過少を呈し1児死亡も少なくない。

平成元年(1989)から平成8年(1996)までに当院NICUに入院した双胎は1児入院を含め189組(一絨毛膜性95組, 二絨毛膜性94組)333例で、そのうちTTTSでの入院は38組, 76例であった。

TTTSのうち子宮内1児死亡例が6組(15.8%)あり、このうち生存児にPVLが発生したものが1

例(16.7%)であった。TTTSでは神経学的予後が不良のことが多いといわれているが、PVLの1例を含め4例(5.3%)に神経学的後障害を残し、そのうち3例が脳性麻痺を呈した。NICUに入院中の死亡例は6例(7.9%)で376g~998gの超低出生体重児であった。TTTSでは子宮内1児死亡、早産、低出生体重児、IUGR、仮死出生が多いことも中長期予後不良の原因であると考えられ、その分析も試みた。なお、一絨毛膜一羊膜性双胎1児死亡例で選択的胎内手術(死児娩出)を施行し、生存児を5週間胎内で生育した後娩出し、当院NICUで加療した1例(女児)は12歳になるが発育、発達ともに順調である。